

『物理基礎/化学基礎/生物基礎/地学基礎』の「生物基礎」, 『生物』

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

「生物基礎」

1 前文

「生物基礎」は、科学の基本的な概念や原理・法則に関する理解と、それらを活用して理科の見方・考え方を働かせ、日常生活や社会の身近の課題等と関連した事物・現象について科学的に探究する過程を重視する科目である。(共通テスト問題作成方針より)

今回の受験者数は114,187人であり、昨年度より201人減少し、全受験者数の24.63%であった。理科の他の基礎科目の中で、最も受験者数が多かった。また、平均点は36.46点であった。各科目の平均点については、「物理基礎」は34.68点、「化学基礎」は28.58点、「地学基礎」は28.17点であった。なお、評価に当たっては、15ページに記載の8項目の観点により、総合的に検討を行った。

2 内容・範囲

内容については、「令和8年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」に則り、基本的な概念や原理・法則の理解を問う問題とともに、日常生活や社会の身近な課題等について科学的に探究する問題や、実験のデータから得られる情報を正確に読み取り、知識を活用しながら科学的な視点で考察する問題が作成されており、受験者の知識・技能や思考力・判断力・表現力等を総合的に問うことができていた。

第1問は「生物の特徴」の分野から出題され、第1問Aでは、全ての生物に共通する特徴や植物の代謝に関する問題が、第1問Bでは、遺伝子に関する問題が出題された。第1問Aの間1は、生物の細胞に共通する特徴についての基本的な知識を問う問題であった。生物の共通性については、頻繁に問われる内容であるが、遺伝情報をもつ物質として、DNAではなく、転写によって合成されるRNAに着目することによって、「全ての生物は遺伝情報を持つ」という知識と「RNAは遺伝情報である」という二つの知識を連動させて思考することができるかどうかを問うことができており良問であった。第1問Aの間2は、緑色個体と白色個体の2種類のラン科の植物を題材として、光合成の仕組みを扱った内容であった。特に(2)は、基本的な知識をもとに、与えられた実験のデータを正しく理解し、選択肢の正誤を判断する問題であり、受験者の知識に加え、思考力・判断力・表現力等を問うことができる良問であった。第1問Bの間4では、半保存的な複製について基礎的な知識を問う問題であった。しかし、この問題では2本鎖DNAや1本鎖DNAの本数をxという文字で置き換える数学的な手法を用いて問うことで、半保存的な複製の仕組みに関する知識を活用して思考することができるかどうかを問うことができており、良問であった。

第2問は「ヒトの体の調節」の分野から出題され、第2問Aは、体内環境の維持に関する問題が、第2問Bは、免疫に関する問題が出題された。第2問Aの間3は、異なる条件における深部体温の変化を題材にした問題であった。地球温暖化による酷暑が社会問題となっている昨今、このような題材は受験者にとって身近なものであり、受験者の興味・関心を引く題材設定であったと思われる。第2問Bの間5は、「細胞性免疫」や「体液性免疫」について、この二つの仕組みを正確に区別して理解できているかを問う問題であった。しかし、「細胞性免疫」や「体液性免疫」の区別の度合いに

については、教科書ごとに大きく異なっている。そのため、この問題は「細胞性免疫」や「体液性免疫」を区別して理解できているかを問うよりも、それら二つを合わせた「獲得免疫」についての本質的な理解を問う問題にした方がより望ましかったといえる。第2問Bの問6は、新型コロナウイルスとそのワクチン接種を題材にした問題であった。世界的規模で流行した新型コロナウイルスと、そのワクチンに関して、それを生物基礎と関連付けて取り上げたのは、挑戦的で斬新な試みで、受験者にとっては非常に身近な問題であり、興味・関心を大いに引く題材であったといえる。

第3問は「生物の多様性と生態系」の分野から出題され、第3問Aでは、江戸時代に噴火が起きた富士山を題材とした遷移やバイオームに関する問題が、第3問Bでは、生態系に関する問題が出題された。遷移の題材として富士山は、多くの受験者にとって身近な存在であり、受験者の興味・関心を引く題材であった。第3問Aの問2は、2種のマメ科植物に関する複数のデータから、適切な情報を読み取り、選択肢の正誤を判断する問題であり、受験者の思考力・判断力・表現力等を測る問いであった。第3問Bの問5は、池内の環境を水槽内で人工的に再現した実験を題材にしており、得られた実験のデータを正しく理解することで正答を導き出すことができる問題であり、受験者の思考力・判断力・表現力等を問うことができる問題であった。

3 分量・程度

今年度も大問数は3で、大問ごとにA、Bの中間が設定された形式であった。解答数は合計16で、昨年度よりも解答数は1問減っていた。ページ数は20ページで、下書き用紙ページを除いた実質の問題ページ数は、昨年より2ページ減少していたが、問題の場面設定や実験結果を読み取り、その考察を求める問題が多くあり、昨年と同様に問題の内容は充実していた。

全体の平均点は36.46点であり、昨年度の31.39点よりも上昇していた。大問ごとの正答率を比べると、第1問は60.49%、第2問は77.77%、第3問は79.89%であり、第1問と第3問で正答率に大きな差があった。ただ、各成績層の正答率を見ると、いずれの大問においても得点の下位層から上位層まで識別できるものであったと思われる。

中間AとBのそれぞれ最初の問題は、各分野の基本的な知識を問う問題であり、計六問のうちほとんどの問題で、正答率が80%前後となっていた。逆に、唯一正答率が低かった問題として、第1問Aの問1（正答率37.10%）があげられる。この問題は、先述したように二つの知識を連動させて思考することができるかどうかを問う問題であった。また、正答率が低かった問題として第1問Bの問4（正答率42.24%）もあげられる。この問題は、先述したように半保存的複製の仕組みに関する知識を活用して思考することができるかどうかを問う問題であった。これらのことから受験者全体が、科学の基本的な概念や原理・法則に関する知識を習得することができてはいるが、それらを連動や活用させて思考することが十分にできていないことが推察される。

正答率が高かった問題の中で、第2問Aの問3（正答率84.42%）、第2問Bの問6（正答率89.90%）、第3問Aの問2（正答率87.11%）の三問は、与えられた実験設計を正しく理解し、その結果を表した図を読み解くことで得られた情報から、選択肢の正誤を判断する問題であった。一見すると、1問の中で与えられる情報量が多く難度が高そうな印象を受けるが、基本的な知識が十分に定着していなくても単なる一般常識やデータの読解で解答可能なものが多かったことから、正答率が高かったと推察される。これらの問題は、得点の下位層から上位層までの識別をできるものではあったが、得られたデータから知識を活用して科学的に探究する思考力・判断力・表現力等を問う問題というよりも、得られたデータの読み取りを適切にできるかどうかの情報処理能力を問う問題となっていたと思われる。

4 表現・形式

今年度も、昨年度と同様に全体として問題文や図表が読み取りやすい構成であり、受験者にとっては取り組みやすい問題形式となっていた。全体を通して、見開きで問題が解けるように工夫されたレイアウトとなっており、今後の出題においても、このような適切なレイアウトを継続することが望まれる。

設問全体のうち、知識・技能を問う設問が10問、与えられたデータから考察・判断できることを問う設問が6問であり、データを読み解く問題が昨年よりも4問増加した。一方で、高等学校における探究の過程を意識した仮説検証型の問題は無くなっていた。選択肢の数については、4択が9問、5択が4問、6択が2問、7択以上が1問であり、昨年に比べて7択以上の設問はかなり減っていた。選択肢の形式については、「誤りを選ぶ」が2問、「組合せを選ぶ」が3問であった。「過不足なく選ぶ」と「順序並べ替え」の形式はなく、昨年度と比べて、選択肢の形式のバリエーションは少ない印象を受けた。また大問の構成の順番については、今回の大問も、昨年度と同様に第1問が「生物の特徴」、第2問が「ヒトの体の調節」、第3問が「生物の多様性と生態系」という順番で出題されており、このような学習指導要領の順番に対応した順番での出題によって、受験者が取り組みやすくなっていた。一方で、解答の形式が、解答欄の記入箇所の誤りが起きやすいマークシート形式ということから、第1問から解く受験者の割合が多いであろう共通テストの性質上、今回のような第1問で難度が高い問題が出題された場合、受験者には少なからず心理的負担を与える可能性があるかと推察される。

問題の表現に関して個別にいくつかの設問をみていくと、第1問Bの間3では、⑤の「DNAの全領域の塩基配列がmRNAに写し取られる」という文言について、DNAの全領域ではなく一部の領域であるため誤りとしていると思われるが、この文の「写し取られる」ことを「転写」と解釈した受験者がいた場合、その受験者はDNAの転写によって合成されるのは前駆体mRNAであり、それがスプライシングによってmRNAとなるため、この選択肢は誤りであると考えられる可能性がある。スプライシングについては、生物で学習する内容ではあるが、一部の生物基礎の教科書にはスプライシングについて記載されているものもあり、作問者の意図とは違う解釈で、選択肢の正誤を判断した受験者もいた可能性は考えられる。第2問Bの間4は、④の「自然免疫による異物の排除には、免疫細胞だけでなく抗体も関与する」を誤りとしていた。一見すると、抗体は獲得免疫によって産生されるものであり、自然免疫には関わりがないと判断できそうではある。一方で、多くの教科書には、獲得免疫について説明した文章や図において、抗体が抗原と結合することで形成される抗原抗体複合体は、最終的にマクロファージの食作用によって処理されることが記載されている。これを踏まえると、選択肢の「関与する」という表現では、自然免疫に抗体が関与するかしないかの判断が、受験者によって分かれてしまう可能性がある。この選択肢は、例えば「自然免疫の異物の排除は、抗体が存在しなくても行われる」という明確で複数の解釈が生じない表現が望ましかったと思われる。第3問Aの間2は、図や表、グラフが簡素な表現で表されており視認性が良い一方で、図1の樹木のような図形がカラマツを表しているとは言及されていない。そのため、この図形がカラマツであるかどうかは受験者の判断に委ねられており、受験者の中にはカラマツとは判断できなかったものもいる可能性も考えられる。第3問Bの間5は、生態系について学ぶ上で、意義のある実験であるとは理解をしつつも、生命を故意に奪う環境をつくるという実験設計が、一部の受験者にとっては抵抗感や困惑を与えた可能性が否定できないと感じた。生物基礎では、防除すべき生物として特定外来生物について学習するが、このような生命の尊厳に関する内容は、学校現場においても非常に繊細に扱うべき内容である。今後同様の実験設計を出題する際には、受験者への心理的

負担や、学校現場に対する影響を、最大限慎重に検討し、出題の仕方のできる限りの工夫や配慮が必要である。

5 まとめ（総括的な評価）

○高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストも、問題作成方針をしっかりと反映したものとなっていた。基本的な概念や原理・法則の理解を問う問題に加えて、今年は特に実験のデータから得られる情報を正確に読み取り、知識を活用しながら科学的な視点で考察する問題が多く出題されていた。このことから、学校現場では科学の基本的な概念や原理・法則に関する知識の確かな習得に加え、それらを連動や活用させて思考することや、観察・実験から得られたデータを正確に分析、考察することを意識した授業改善が行われると思われる。

○意見・要望・提案等

今後の試験問題の作成に対し、以下の提案・要望を行う。

- ・科学の基本的な概念や原理・法則に関する知識の本質的な理解を問う問題や、それらを連動や活用させて思考する問題、実験のデータから得られる情報を正確に読み取り、知識を活用しながら科学的な視点で考察する問題は、今年度に引き続き出題されるようお願いしたい。また、今年度は出題されていなかった、仮説検証型の問題について、科学的に探究する力を測る問題として非常に有用であるため、出題を検討していただきたい。
- ・選択肢においては、単なる一般常識やデータの読解で解答可能なものに偏らず、習得した知識と実験の結果から得られる情報を組み合わせて活用することで正答を導くことができるような選択肢の吟味をお願いしたい。また、選択肢の形式において、例えば「順序並べ替え」は、事象のプロセスを正確に理解しているかどうかを測る手段として有用であるように、受験者の能力をさまざまな観点で測るためにも、選択肢の形式の充実を検討していただきたい。
- ・表現においては、問題文や選択肢において、複数の解釈を生じないものや、受験者に混乱や心理的な負担を与えないものとなるように慎重な検討をお願いしたい。また、視認性が良く分かりやすい図や、図に適切な説明が加えられているなど、データを読み解く前の段階で、すべての受験者の理解に差が生じないような図や表の配慮をお願いしたい。
- ・基礎を付した科目の中で、受験者が最も多い「生物基礎」は、学習指導要領理科の目標である「自然の事物・現象に主体的に関わり、科学的に探究する力と態度を養う」ことに最も影響力のある科目とも言える。そのため、「物理基礎」「化学基礎」「生物基礎」「地学基礎」の4科目で平均点や得点のちらばり等に差が生じないように、問題の難易度を調整していただきたい。
- ・最後に、今年度の共通テストも、これまでに実施されてきた共通テストと同様に、受験者の基礎的な学習の達成の程度を判定するという目的に則して、様々な配慮や工夫、改善を基に、適正な問題作成がなされていたと思われる。問題作成に当たられた方々が、高等学校の学習内容について研究・検討を重ね、細心の配慮を持って作成されてきたこと、本委員会の提案を真摯に受け止め、改善に向けて取り組まれてきたことに心から敬意を表し、意見・評価を締めくくる。

『生物』

1 前文

「生物」は、科学の基本的な概念や原理・法則に関する深い理解を基に、基礎を付した科目との関連を考慮しながら、自然の事物・現象の中から本質的な情報を見い出したり、課題の解決に向けて主体的に考察・推論したりするなど、科学的に探究する過程を重視する科目である。

今回の受験者数は 56,314 人であり、昨年度より 1,671 人減少し、全受験者数の 12.15%であった。理科の他の科目と比較すると、「地学」に次いで受験者数が少なかった。また、平均点は 55.01 点であった。理科の他科目の平均点については、「物理」45.55 点、「化学」56.86 点、「地学」44.29 点であった。なお、評価に当たっては、15 ページに記載の 8 項目の観点により、総合的に検討を行った。

2 内容・範囲

内容については、「令和 8 年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」に則り、「科学の基本的な概念や原理・法則に関する深い理解を基に、科学的に探究する過程を重視する」ことを背景として、基本的な概念や原理・法則の理解を問う問題とともに、観察、実験、調査等の結果を総合的に分析し解釈する力を問う問題が作問されていた。受験者にとって既知でないような資料を扱う問題においても、設問から得られる複数の情報を活用して、高等学校の学習で身に付けた知識や思考力を測るような問いが、適切に取り入れられていた。また、全体を通じて、生命現象を分子レベルで捉えるものや、全体像を俯瞰するもの、あるいは動的な過程に着目するものなど、多様な視点に基づいた出題がなされていた。一方で、昨年度は探究の過程を意識した場面設定のもと、適切な実験計画を問う問題が見られたが、今年度は出題されなかった。

範囲については、学習指導要領に定める「生物の進化」、「生命現象と物質」、「遺伝情報の発現と発生」、「生物の環境応答」、「生態と環境」の 5 分野の全てから幅広く出題されるとともに、分野融合的な問題も出題され、全体としてバランスの良い出題範囲となっていた。

第 1 問は、人類の進化を題材に、遺伝子やバイオテクノロジーなどを扱った分野融合的な内容であった。特に、痛みの受容における個人差の背景としてネアンデルタール人由来の遺伝子が関与しているという最近の研究成果に触れた点は、受験者の知的好奇心を刺激する興味深い試みとして、高く評価したい。問 2(2)は、ハーディー・ワインベルグの法則が成り立つ集団における計算問題であった。少なくとも 1 問は計算問題を組み込むことは、受験者の学力を多角的・複合的に測定する上で有効であり、継続的な出題を期待したい。

第 2 問は、真核細胞の構造を題材に、細胞骨格やモータータンパク質を扱った内容であった。問 2 は、複数の実験条件とその結果を比較することで、モータータンパク質等における性質を論理的に導き出す内容であり、探究の過程を重視した良問であった。

第 3 問は、ショウジョウバエの発生を題材に、母性因子や前後軸形成における物質の不均衡分布を扱った内容であった。問 2 は、タンパク質 B による CmRNA の翻訳阻害について、結合対象の特定や、必要なアミノ酸領域の実験データからの同定、調節機構の考察を行う内容であった。実験データを論理的に読み解く力や、分子的な調節機構の知識に基づいた多角的な考察力が求められ、受験者の学力を評価できる良問であった。

第 4 問は、生物の環境応答をテーマに、植物と動物の刺激の感知に関する基礎知識を問うとともに、植物の題材としてシロイヌナズナを、動物の題材としてコウモリとガを扱った分野融合的な内

容であった。問2(2)は、原因が「発信」「経路」「受信」のどの段階に不全があるかを論理的に特定させる、生物学的な思考を問う良問であった。

第5問は、生物と環境についてマングローブ植物の一種であるヤエヤマヒルギを題材に、根と土壌環境の相互作用に着目しつつ、過酷な環境下における呼吸や窒素獲得の仕組みを探究する内容であった。特に、脱炭素社会の実現に向けた「ブルーカーボン」の主要な担い手として、世界的に注目を集める素材を採用した点は、現代的な社会課題と生物学の学びを関連付ける試みとして極めて意義深く、高く評価できる。一方で、資料の解釈に留まらず、仮説検証など探究の過程をより重視した内容となっていれば、素材の魅力をさらに引き出す良問となったのではないかと考える。

3 分量・程度

分量については、大問数は5で、すべての大問において中間(A・B)の設定はなかった。小問数は昨年度より2減の17、解答数は1減の24であった。ページ数は32ページと昨年度より4ページ増加したが、これは見開き完結の構成を維持するために十分な余白を確保した結果であった。実質的な問題量は昨年度と同程度と評価でき、受験者が解答に要する時間は十分に確保されていたものと判断される。加えて、各大問の分量に大きな差は見られなかったため、受験者が特定の設問に偏ることなく時間配分を検討できる適切な構成であった。

程度については、平均点は55.01点で、昨年度から2.80点上昇したものの、適切な難易度の範囲内であった。令和4年度および令和5年度の大幅な難化と低得点傾向を受け、令和6年度以降の改善が継続・定着している。受験者の学習成果を適正に評価する観点からも、今後も今年度のような安定した平均点を維持されたい。

大問別に見ると、第3問の正答率は37.99%と最も低く、第5問は71.39%で最も高かった。両問の正答率の差は33.40ポイントに達しており、大問間における難易度の差が顕著に表れる結果となった。また、個々の設問の正答率を踏まえると、第3問において学力の最上位層の受験者の正答率が誤答を下回った小問が1問、ほぼ同じであった小問が1問あり、これらの問題については上位層の学力を識別できていたか疑問が残る。第3問以外のいずれの大問においては、学力の下位層から上位層まで識別できる適切な難易度設定であった。

個別の問題で見ると、第1問の問1は、正答率が42.12%と比較的低かった。特筆すべきは、最上位層を含む全学力層において、受験者の1割強が「①ゴリラからチンパンジーへ、チンパンジーからヒトへ進化した。」という、系統進化上の根本的な誤解に基づいた選択肢を選んで点である。この結果は、人類の進化に関する基礎知識が定着していないのみならず、進化の概念そのものに重大な誤認が根付いている可能性を示唆しており、高等学校生物教育における喫緊の改善課題であると言わざるを得ない。問4は組換えに関する設問であり、正答率31.86%という数値が示す通り難度は高かったものの、最上位層に対する識別力は十分に確保されていた。本問は、組換えの知識・技能を確実に習得していれば決して複雑な構成ではない。しかし、正答率が低迷した背景には、近年の高校生物教育において、図表やグラフから情報を読み解く学習活動は増加している一方で、実験データの数値を科学的な思考に基づいて解析・処理する学習活動は減少しているという傾向が、少なからず影響していると推察される。

第2問の各設問はいずれも学力層の識別ができており、共通テストが担う役割を大いに果たしていたと評価できる。また、分量も適切に設定されており、受験者が無理なく取り組むことができる情報量であった。

第3問の問1の正答率は15.20%と、今年度の本試験で最低の数値となった。これは、最上位層を含めても、母性因子の概念を本質的に理解している受験者が極めて少ない実態を浮き彫りにして

いる。令和5年度本試験の類題でも正答率が8.34%と低迷していることから、数的な解析・処理への課題は依然として根深く存在しているものと考えられる。また、問2(1)の正答率は38.82%であり、①のDNAと③のリボソームを選択した受験者も多かった。これは、発生過程における母性因子の挙動についての詳細な知識が不足しており、転写抑制との混同や、「翻訳の場はリボソームである」という先入観にとられるなど、断片的な知識に頼って選択した受験者が少なからずいたためと推察される。加えて、問2(2)(正答率25.17%)及び問2(3)(同34.21%)については、難度は高かったものの、学力の中位層から最上位層にかけて識別できていた。

第4問は、適切な分量と情報量を維持しつつ、正答率や識別力においても極めて均衡がとれた構成であった。単なる読解力のみで解答可能なものではなく、生物学の知識を基盤とした思考力を的確に測定しており、試験全体の評価精度を下支えする質の高い設問であった。

第5問は、問4を除いた全設問で正答率が70%を超えるなど全体として平易であったが、各学力層の識別は適切になされており、試験全体における得点源としての役割を果たしていた。こうした構成は、最後の大問まで着実に解答を進めた受験者の努力を適正に評価するのみならず、試験全体を俯瞰して解答順序を検討する戦略的な解答スタイルにも適合する出題であったと言える。

4 表現・形式

表現については、図表が多く取り入れられるなど、全体として受験者にわかりやすい表現が用いられており、理解しやすいものであった。また、レイアウトに工夫が見られ、すべての問題において見開きで完結するものとなっていた。

形式については、短めのリード文から設問へとつながるオーソドックスなつくりが全ての大問に見られた。なお、リード部分に会話文が用いられた問題はなかった。

「過不足なく選ぶ」設問は2問で、「二つ選ぶ」設問は1問のみであった。これらの形式は他と比べて解答時間を要する傾向にあるが、推測を排除し、正確な読解力等を測定する手法として有効である。部分点の設定については、原則として必須ではないものの、今年度のように全体の得点バランスを考慮して検討する余地はあると考える。

知識・技能を問う設問は4問、思考力・判断力・表現力等を問う設問は20問であった。特筆すべきは、後者のうち11問において、習得した知識・技能を基盤とした思考や判断が求められていた点である。こうした設問の増加は、日頃の学習成果が合否に正当に反映されることにつながり、誠実に学習に取り組んできた受験者の努力を適正に評価する観点から、極めて高く評価できる。

個別に見ると、第1問では、問2から問4が思考力・判断力・表現力等を問う形式であったが、その全てが高校生物の知識を前提とした設計となっており、秀逸であった。また、問3においては配置の工夫が見られ、図2と図3を順に示すことで、受験者はストレスなく問題を解くことができたと思われる。一方、問4の表2では、対立遺伝子が指定するアミノ酸の組み合わせを染色体状の楕円で囲むという独自の表現が採られており、初見の受験者に少なからぬ戸惑いを生じさせた可能性がある。実際、全体の正答率は低迷したものの、学力の中上位層から最上位層にかけては十分な識別が取れており、情報の意図を的確に汲み取れたかどうか、得点の分かれ目となったと推察される。

第2問の問3では、精子の鞭毛運動におけるATPの役割や、微小管の滑り運動が屈曲へと変換される動的プロセスの考察が求められた。しかし、この立体的かつ複雑な現象を平面的な図から正確に再構成することは、多くの受験者にとって認知的負荷が高かったと推察される。設問の本質である「仕組みの考察」に受験者が注力できるよう、イメージ形成を効果的に補助する図の構成や、視覚情報の提示方法にさらなる工夫が必要だと考える。

第3問の問1では、問題文の表現に訂正がなされた。訂正内容は適切であり、受験者が誤解なく解答するためには不可欠な対応であった。一方で、試験開始直後に各会場で板書による指示となったため、一部の受験者に混乱を招いた可能性を否定できない。大問末尾に配置された問3の正答率は77.68%であった。他の設問がいずれも40%を下回る難問揃いであったことを踏まえると、本問の難易度は際立って平易である。こうした設問が序盤から中盤に配置されていれば、難問続きによる受験者の心理的圧迫を和らげ、より冷静な時間配分を促せたのではないかと推察される。

第4問では、見開き完結のレイアウトを維持した結果、1ページあたりの情報密度が小さくなった箇所が比較的多く見られた。計算用余白を挿入して調整する手法も考えられるが、情報の視認性や一覽性を重視し、見開き形式を堅持した作問姿勢は、受験者の心理的・物理的な負担軽減に繋がる配慮として高く評価したい。

第5問の問3は、「過不足なく選ぶ」問題であり、本年度の問題で唯一部分点(1点)が設定された。しかし、本形式が全問を通じて2問のみであることや、正確な読み取り能力を問うという目的を重視すれば、部分点は設けず、完答のみを正解とすることも検討の余地があると考えられる。

5 まとめ(総括的な評価)

○高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストは、昨年引き続き共通テストの問題作成方針の意図を色濃く反映したものであった。高等学校においては、新課程で冒頭に配置された進化・系統分野の重要性を再認識し、単なる知識伝達に留まらず、分野の本質的な面白さを伝えることで生徒の興味・関心を喚起し、学びを深化させる指導の工夫が引き続き望まれる。また、図表やグラフから情報を読み取るだけの学習から一歩踏み込み、実験データから得られた数値を自ら計算・加工し、論理的な根拠を導き出す力を育てる指導の工夫が必要だと考える。

○意見・要望・提案等

今後の試験問題の作成に対し、以下の提案・要望を行う。

- ・試験の公平性と信頼性を担保するため、出題に不備がなく、訂正が生じることのないよう万全を期されたい。受験者の動揺や時間配分への影響を防ぐため、入念な校閲体制を構築し、正確な出題を徹底してお願いしたい。
- ・昨年度見られたような、探究の過程を重視した場面設定や、実験計画の立案・分析を問う設問の継続的な出題をお願いしたい。その際、単なる資料読解に終始せず、「生物」の知識・技能を基盤として論理的に思考し、科学的な解決へと導く過程を適正に評価できる構成を重視されたい。
- ・知識・技能を問う問題と、思考力・判断力・表現力等を問う問題がバランス良く出題されるようお願いしたい。前者は、日頃の学習成果が正しく反映されるものとし、後者は一般常識や読解力のみで解答可能なものを避け、修得した知識・技能の適切な活用・応用を前提とした出題を徹底されたい。また、問題量や難易度、順序などを精査し、考察する時間が十分に担保された適切な出題を引き続きお願いしたい。
- ・高等学校で科目選択をする際、共通テストにおける得点のしやすさが科目選択の大きな要因となっている現状では、「物理」「化学」「生物」「地学」の4科目で平均点や得点のちらばり等に差が生じないように、今後も問題の難易度の平準化を是非図っていただきたい。
- ・最後に、問題作成に当たられた方々が、高等学校の学習内容について研究・検討を重ね、細心の配慮を持って作成されてきたことに心から敬意を表し、意見・評価を締めくくる。